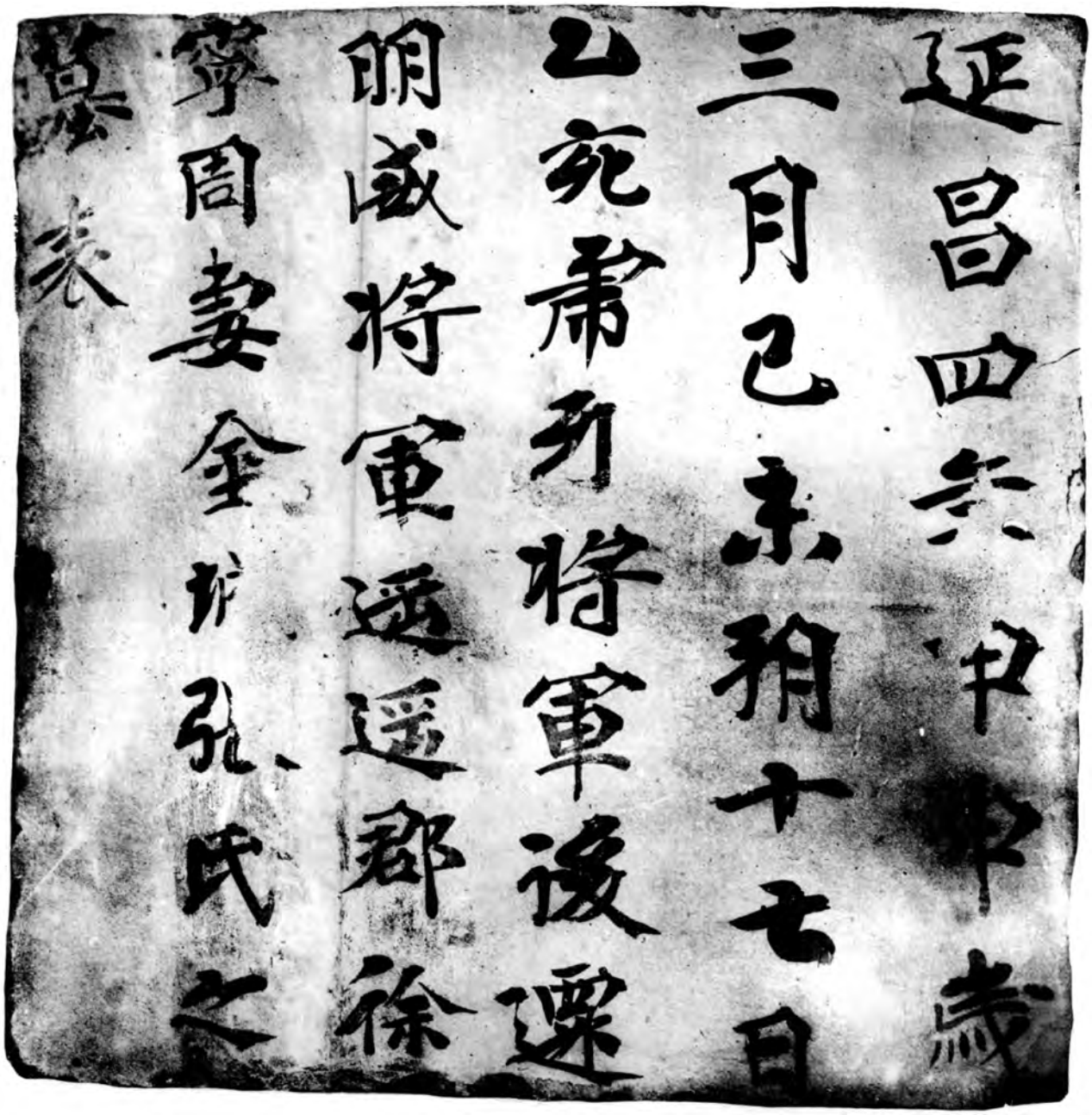
主図版①『徐寧周妻張氏墓表』



延昌四年甲申歲
三月己未朔十七日
乙亥虎牙將軍後遷
明威將軍遙遙郡徐
寧周妻金城張氏之
墓表

「書の古典観照」⑦

「高昌墓表」①『徐寧周妻張氏墓表』、『任謙墓表』

補助図版②『任謙墓表』

「高昌墓表」と称される一群の朱筆や墨書の墓誌が、民国年間に西域で発見されている。大正七年には、『談書会誌』で大谷家将来の三件が発表されている。右頁の図版「徐寧周妻張氏墓表」がその中の一件である。民国二十年には、同じところから発見された墓誌が、百余件集録された『高昌専集』が刊行されている。図版に示した『徐寧周妻張氏墓表』（墨書）、『任謙墓表』（朱書）の二件は、これに属する。大きさがほぼ三十センチ余り、厚さ三センチ余りの方形の石ではなく土を固めて作った「塼（煉瓦）」である。その表面に朱や墨を用いて亡くなった人物の年月、官職、人名などを筆書している。内容が簡単であるために、墓誌でなく墓表と称している。五世紀から七世紀頃までの墓表が中心である。六朝時代の真跡資料は、敦煌出土の写経や残紙以外にほとんど伝来せず、大変珍しい。それ故に、この「高昌墓表」の一群の真跡資料は、六朝碑刻の書法研究の上で大変重要視されている。次回から、碑刻の書との比較をしながら、六朝書法の特徴を鑑賞しよう。

伊藤滋（書斎名・木鶏室）

書道芸術院

平成の群像（2018）

大越墨扇

第67回毎日書道展「一点素心」　大越墨扇書

「古代文字にロマンをのせて」

立ち寄ったデパートの書道展会場で出会った種谷扇舟先生の作品に衝撃を受けました。「いつか私も書いてみたい!!」そんな一瞬でした。その後、近くで扇舟先生の書道講座が開講され第一期の受講生となり、そのまま「白扇書道会」に入会し30数年になります。

書の知識のない私にも丁寧なご指導や励まし「きれいな墨色だね」と〝墨扇〟の雅号を頂いた事、ご一緒した中国の旅での熱いご指導、本物に触れることの大切さ等多くを学ばせて頂いた事などをふり返る時、感謝の気持ちでいっぱいになります。

その後、北京大学留学から帰国された〝萬城先生〟のご指導を受けるようになりました。

お稽古は中国の話を織り交ぜながら、時には訪日中の中国の有名書家を教室に招いての交流などもありました。

中国の旅は、先生の大学の講義をうけたり、学生や書家、画家との交流、各地の博物館、遺跡を巡り、数多くの青銅器、木簡、帛書など、貴重な文物を間近にじっくり見学できるものでした。

また、私は萬城先生の作品や講義を聞くなかで、古代文字特に「金文」に惹かれていきました。

青銅器に鋳込(いこ)まれた「金文」は独特の意匠と造形をもつ文字です。初めの頃は一文字一文字どんな造形を見せてどんな成り立ちなのかと辞書を片手にワクワクしたものです。古代文字は、身近な事象や生活から生まれているものに親近感を覚え楽しくなっていきました。こんなことから古代人の文化や生活に想いを馳せ、ロマンや夢をのせて草稿する幸せな時間もあります。

中字から大字に挑戦しはじめ、強い線、構成、立体感、雰囲気、墨色等々…悩み、苦しみながら格闘しているこの頃です。

掲載の作品〝一点素心〟は、心清らかに未完の〝苦しみ〟を〝楽しみ〟に変え次回に向けて〝ダッシュ〟したいとの意気込みを表現しました。今後も、先生と良き書友に支えられ歩んでいきたいと願っています。

書のひろば

理事長　辻　元　大　雲

書道芸術院秋季展、書道芸術院の書・漢字　盛況に開催

10月2日～7日までセントラルミュージアム銀座およびアートサロン毎日にて、秋の企画展として書道芸術院秋季展並びに新企画「書道芸術院の書・漢字」展が、開催され多くの観客で賑わった。

秋季展は2月の本展特別賞選考の折に選抜作家の選考が行われ、財団役員（顧問・理事・監事、評議員・参事）のほか、参与会員、審査会員より併せて120名余、更に審査会員候補より公募した作品325点、214名より秋季菊花賞10名、秋季俊英賞40名の作品を展示発表した。漢字から前衛書まで5部門の作品は多様で変化に富み、見応えのある充実した展覧会となった。

今回より新しい企画として部門ごとの院の将来を担う中堅、若手作家を地域性や会派別などを考慮しながら、一人2ｍの壁面に1～2点意欲的な作品を発表していただいた。初回は「書道芸術院の書・漢字」として漢字部所属の17名を選抜、作品傾向など様々で見応えある展覧となった。

特に最終日7日、外部講師をお招きして作品研究会を開催、初めての試みであったが大変有意義な研究会が開催できたことは予想以上の成果をいただいた。

また6日土曜日に行った表彰式、研究会、祝賀懇親会は会員多数の参加はもとより、多くのご来賓のご臨席をいただき盛会であった。

詳しくは別掲の報告をご参照いただきたい。

国際交流ウイーン書道展継続開催

昨年70回記念事業として開催したウイーン展と併催された「国際交流ウイーン書道展」は本年より書道芸術院の主催として継続開催することとなり、10月23日～30日までオーストリア日本大使館広報文化センターを会場として第21回展が開催された。作品は財団役員（顧問・理事・監事・評議員・参事）にご依頼し、他に今回同行された審査会員にもご協力をお願いし55点となった。

半切⅓大、軸装・枠装の多彩な作品がウイーン市民にどう評価されるか楽しみである。ワークショップも会場および市内にて大人子ども合わせ3回開催する。スロバキアでの開催も予定したが現地大使館の都合により今回は見合わせ、来年実施することとなった。

今回は団長辻元大雲、副団長下谷洋子、同行7名（添乗員1名含む）の計10名で10月22日～27日まで訪問する。詳細の報告は次号にて。

第70回毎日書道展記念 現代の書群馬巡回展開催

第70回展の記念事業として現在全国展開中の毎日役員作品巡回展は、10月11日～17日群馬県高崎シティギャラリー全館を使用して充実迫力ある展覧を行った。実行委員長を本院下谷洋子常務理事が務め立派に責務を果たした。

14日には午前中仲川恭司毎日書道会理事による「上野三碑」見学と解説会が行われ、「ユネスコ世界の記憶」登録を寿ぐタイムリーな企画も行われた。午後には中原志軒奎星会会長による作品解説、夕刻からは多数の出品者、ご来賓を交え出品者懇親会が高崎駅そばのホテルメトロポリタンにて盛大に開催された。

巡回展は今後来年3月末まで佐賀、北海道旭川、新潟、和歌山と順次開催される。

創立記念日特別講演会 東博学芸企画部長　富田淳氏

11月23日（金・祝）上野精養軒にて開催される本院恒例の特別講演会は今回東京国立博物館学芸企画部長の富田淳氏を講師にお招きして開催される。奇しくも来年1月16日から2月24日まで、東博平成館にて開催される特別展「顔真卿―王羲之を超えた名筆―」と正に時機に適ったタイムリーな講演会となった。ご準備などで多忙を極めておられることと拝察しながら幸運に感謝申し上げたい。

・講演会参加希望は院事務所に事前申し込みを。先着200名まで

特別展「顔真卿―王羲之を超えた名筆―」は今月号の誌上にてご紹介しているが、必見の展覧である。お見逃しのなきよう心しておかれたい。

・千年の時を超え、激情の書「祭姪文稿」日本初公開と謳い、台北故宮博物院の秘蔵の名品の数々と王羲之から日本の書への影響までも俯瞰（ふかん）する展示内容である。展示は前後期に分けて行われるため出来れば前期後期2回以上の参観が望ましい。

・毎日書道会理事・監事による本展にちなむ大作も前後期に分けて展示される予定。（平成館一階右側の展示室にて）本院から辻元大雲、下谷洋子出品。

・毎日書道会出品団体対象の特別観覧券発売　一般当日券1600円（前売券1400円）を特別料金1枚1100円（10枚以上まとめて、毎日新聞社事業本部　顔真卿展チケット係まで、別紙申込書にて、申込書は出品各団体責任者に送付されている）

・申込期間11月1日～12月20日（数量限定につきなくなり次第終了）

・講演会当日希望者に限定販売する予定。枚数に限度あり。ご了解を。

漢字(二)

飯田春香

文字の構図と表現

作品作りに欠かせないのが構図です。紙面は長方形、正方形、また縦長とありますが、書く文字により紙の形を選びます。構図としては、

①△形は尖鋭で安定感がある。

②□形は知性豊かで安定感もある。

③○円形は穏やかで円満、やさしさがあり情緒的。

④▽逆三角形は不安定であるが、それなりの面白さがある。

次に、表現の仕方です。いろいろな書体がありますが、楷書は一字書の表現が難しく、行書、草書が主になりますが甲骨文字、金文なども使います。

この作品「雲三態」は2012「書道芸術院秋季展推薦作家展」で発表したものです。雲のさまざまなイメージを念頭に書いたもので、見る人がどのように鑑賞してくれるか想像しながら取り組んだものです。入道雲、うろこ雲、綿雲、すじ雲等々…。

この頃から「雲」は私の大切な文字となりました。これからも雲の様々な形を追及してみたいと思います。

書道芸術院秋季展推薦作家展

「雲三題」　飯田春香書

21世紀の書

―私の主張―

前衛書(二)

嵯峨大拙

今回の作品の題名は「ビジョン」。作品サイズは縦8m横3m、平成17年4月「2005書inみやぎ」に出品した作品です。原理を実際に用いて甲骨文字風にして、含墨も変化をつけ、線は太くあるいは細くしたり、また、直線を使用して曲線で終筆を流してみたり、筆を自由自在に使いこなす事を心がけた創作作品です。表現効果を出すために横長のイニシャルの印を使用しました。外側の淡墨の線は刷毛を使用し、所々に左右の区別をつけました。そのために淡墨の線を入れて余分な空間は切り取り、真黒のマットにするように表具屋に依頼しました。表具屋泣かせの作品です。

2005書inみやぎ「ビジョン」　嵯峨大拙書

書道芸術院秋季展

書道芸術院役員・審査会員選抜・審査会員候補公募

会期　平成30年10月2日(火)～10月7日(日)

会場　セントラルミュージアム銀座
　　アートサロン毎日（「書道芸術院の書・漢字」展・毎日新聞社内）

秋季展実行委員長
種谷萬城

セントラルミュージアム銀座を会場に、財団役員及び本年2月開催の第71回書道芸術院展で選抜された作家123名、更に審査会員候補より公募された357点、214名の中から厳正な選考の結果、秋季菊花賞10名、秋季俊英賞40名、計50名、総計173名の作品が展示された。

アートサロン毎日を会場に併催された「書道芸術院の書・漢字」展は、将来の書道芸術院を担い、今後の活躍が期待され、日頃から情熱を持って書に取り組んでいる新進気鋭の作家が、意欲作を発表する展覧会で、今年からの新しい企画。理事長、常務理事、漢字部所属理事・監事の選考委員が各総局、各社中から、将来の飛躍に期待を込めて選考した17名の作品を展示した。

10月6日(土)午後2時から、紙パルプ会館3階で、表彰式、研究会が開催された。研究会では、スクリーンに、秋季菊花賞の作品等を映し、辻元大雲理事長と各部選考委員が講評を行うなど、充実した内容であった。又、5時からは、祝賀懇親会が同会館2階で開催された。ご祝辞を頂いた、三岡昭博様（毎日新聞社事業本部総務企画部長）、仲川恭司様（独立書人団理事長）。乾杯のご発声を頂いた名児耶明様（五島美術館副館長）など多数のご来賓をお迎えし、和やかな会であった。

10月7日(日)午前10時から、アートサロン毎日の会場で、「書道芸術院の書・漢字」展の研究会が開催された。外部講師として鬼頭墨峻先生（日本書道美術院理事長）、仲川恭司先生（独立書人団理事長）、室井玄聳先生（創玄書道会理事長）をお迎えし、理事長、常務理事、漢字部所属理事・監事、出品者全員が揃い、充実した研究会となった。研究会では、一人一人の出品作品に先生方から具体的で、きめの細かい講評を頂き、中身の濃い内容となり、実り多き研究会となった。

参観者数は、セントラルミュージアム銀座が(1078)人、アートサロン毎日が(415)人であった。

秋季展会場

2018年　書道芸術院秋季展公募出品集計

部	出品点数	出品人数	秋季菊花賞	秋季俊英賞	落選
漢　字	146	86	4	17	65
か　な	12	9	0	3	6
現代詩文書	90	57	3	11	43
前衛書	108	61	3	9	49
篆刻・刻字	1	1	0	0	1
合　計	357	214	10	40	164

秋季展表彰式

漢字の書会場にて講師らと

〈併催〉「書道芸術院の書・漢字」展

《 朝　倉　希代子 》

〈暉〉　150×150㎝

《 安　藤　華　祥 》

〈水横觀雁度〉　116×87㎝

《一　谷　春　窓》

〈菜根譚〉　112×80cm

《大　内　熒　軒》

〈沈黙〉

230×85cm

《河　岡　北　秀》

〈陟〉　150×150cm

《川　村　美　泉》

〈海〉　150×150㎝

《菊　池　昌　春》

〈長相思〉

240×90㎝

《木　村　香　翠》

〈寒山詩〉

225×90㎝

《小竹正高》

〈衆妙〉　74×172㎝

《小宮静舟》

〈宿雲門寺閣〉

175×45㎝

《橘由華》

〈蘇東坡詩〉

171×51㎝

《東福青篁》

〈過香積寺〉

180×60㎝

《中尾琴麗》

〈戯答元珍〉

168×52㎝

《松浦錦扇》

〈鳳(甲骨文)〉

120×176㎝

《藤　井　龍　仙》

〈墨竹〉　174×120㎝

《渡　辺　柱　雲》

〈神亀寿〉　135×135㎝

《西　川　翠　嵐》

〈杜甫詩〉

235×53㎝

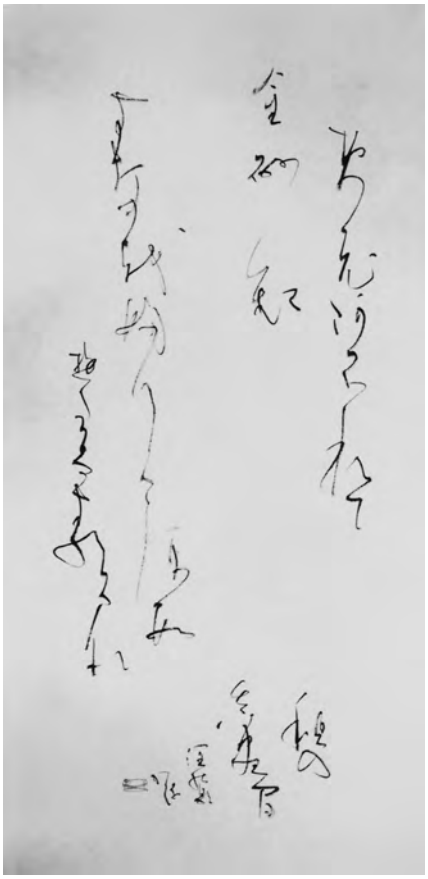
書道芸術院役員作品

理事長・常務理事・常任総務・総務・審査会員選抜

〈夕富士の〉

（公財）理事長・常任総務　辻 元 大 雲　　65×142㎝

〈秋の賛歌〉



（公財）常務理事・常任総務　下谷洋子

136×66.5㎝

〈田仕舞〉

（公財）常務理事・常任総務　小竹石雲

176×57㎝

〈禅語二顆〉

（公財）常務理事・常任総務　後藤大峰　70×100㎝

〈鑑真の〉

常任総務　出原悦柳

180×60㎝

〈想〉

常任総務　大町青蓮　86×125㎝

〈秋興〉

常任総務　影山扇葉

175×53㎝

〈栄〉

常任総務　有野琤扇

121×91㎝

〈白鷺鷥〉

常任総務　岩垣若翠

180×55㎝

〈海の風景〉

常任総務　桐岡銘紀

177×56㎝

〈神路山月さや〉

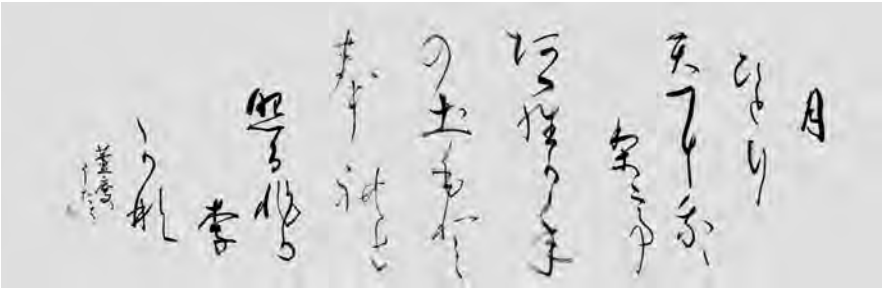
常任総務　九條純代

175×53㎝

〈忠による〉

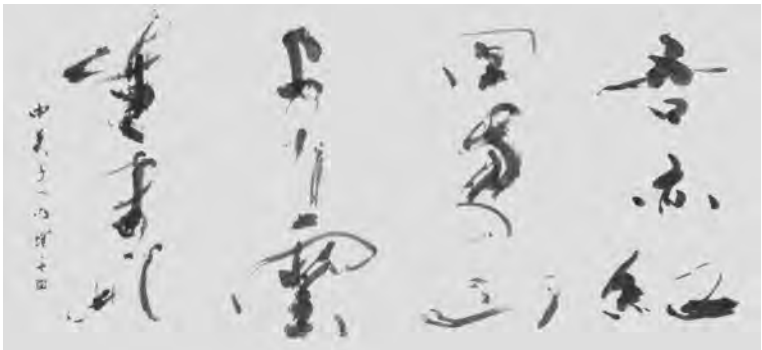
常任総務　倉林紅瑤

110×80㎝



〈月ひとり〉

常任総務　小島孝予　53×160㎝



〈吾亦紅〉

常任総務　斉藤理舟　70×150㎝

〈stairway to heaven〉

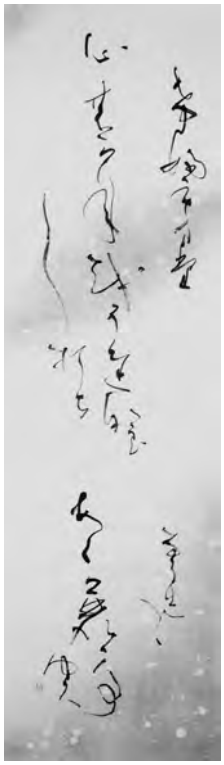
常任総務　佐藤華炎

174×58㎝

〈白楽天詩〉

常任総務　島田白露

175×55㎝



〈けふもまた〉

常任総務　鈴木せつ子

181×53㎝

〈飛天〉

常任総務　鈴木智翠　60×180㎝

〈流れ星〉

常任総務　髙橋真舟　55×175㎝

〈一水〉

常任総務　知野洛水

152×73㎝

〈思い〉

常任総務　名取雅子　91×121㎝

〈希望〉

常任総務　平岡千香子　72×152㎝

〈和文潜舟中所題〉

常任総務　徳岡翠江

180×53㎝

〈寺山修司のうた〉

常任総務　横田汀華　61×182㎝

〈「風」による〉

常任総務　宮 﨑 芳 玉　70×147㎝

〈白銀に輝く樹氷〉

常任総務　武 山 櫻 子

150×70㎝

〈跳〉

総務　青 柳 明 華　90×120㎝

〈きみへのおもい〉

総務　金濱珀燁

121×91㎝

〈泉〉

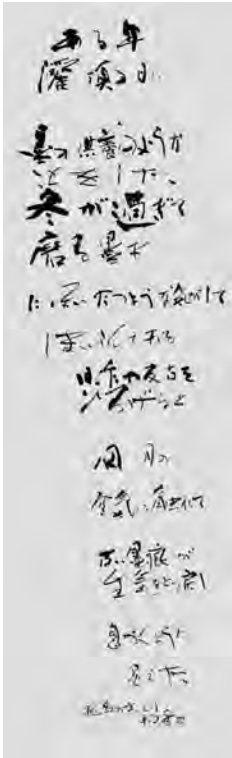
総務　岡村恵窓

120×90㎝

〈川面〉

総務　小竹明峰　57×168㎝

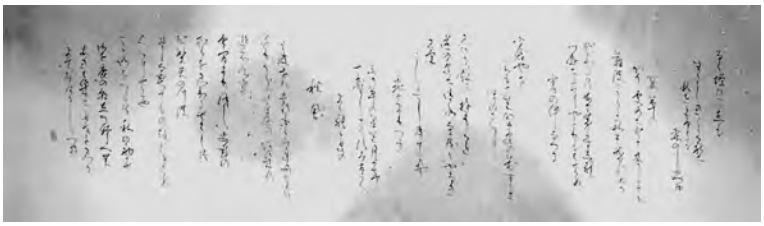
〈反古供養〉



総務　佐藤初香

173×53㎝

〈鳴く蟬の〉



総務　都丸みどり　53×180㎝

〈菜根譚〉

総務　竹浪叙舟

175×55㎝

〈夢幻境〉

総務　鈴木承琳　60×180㎝

〈南樓望〉

総務　谷田熾箋

180×60㎝

〈弥生子の歌〉

総務　長島僊雨

175×55㎝

〈林〉

審査会員　一森琴映

163.5×53㎝

〈夏の夜〉

審査会員　工藤溪舟　61×155㎝

〈燕歌行〉

審査会員　上田琴秀

163×52cm

〈ミラノ〉

審査会員　小野寺 久 美　　61×182cm

〈陸游詩〉

審査会員　大窪翠村

180×60cm

〈屏風（其の二）〉

審査会員　加藤觴流

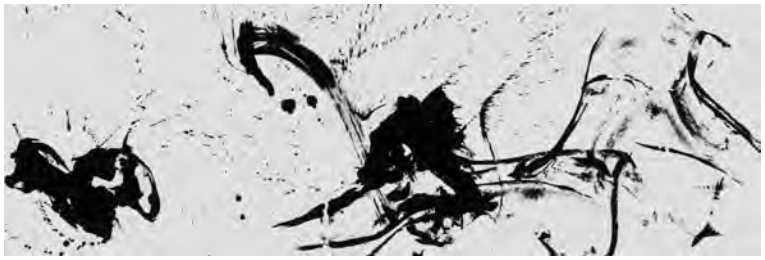
142×42cm

〈旅夜書懷〉

審査会員　熊谷桃華

175×53cm

〈翔〉



審査会員　佐 藤 紅 茜　　60×180㎝

〈秋は白〉

審査会員　千 田 春 月　　60×180㎝

〈中也の詩〉

審査会員　佐藤弦佳

180×61㎝

〈夏の海〉

審査会員　永 井 鳳 雪　　60×180㎝

〈新古今和歌集より〉

審査会員　濱田竹雪

181×52㎝

〈提〉

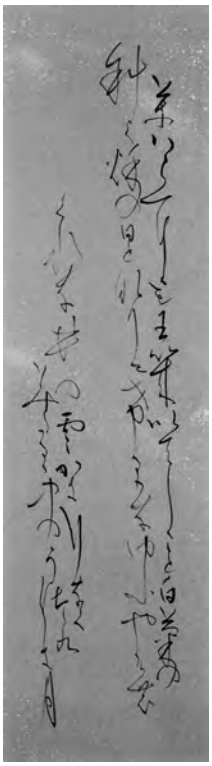
審査会員　吉永沓花　89.5×119.5㎝

〈涼州歌第二畳〉

審査会員　須田瑞兆

175×55㎝

〈まばらにも〉



審査会員　藤村昌子

165×46㎝

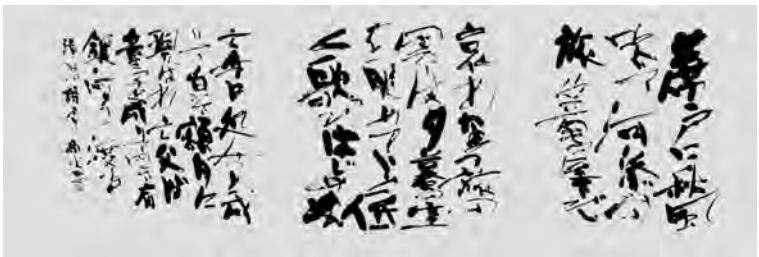
審査会員候補
秋季菊花賞

〈邊〉 新爽風 120×90㎝

〈夢〉 吉田小碧 120×90㎝

〈泊舟盱眙〉 清水蘭舟 165×52.5㎝

〈山房春事二首其一〉 小山内谷玲 55×175㎝



〈漂泊〉 茂木絢水 61×182㎝

〈太刀の山〉

嶋　由香　91×121㎝

〈涼〉

平田悦子

178.5×59.5㎝

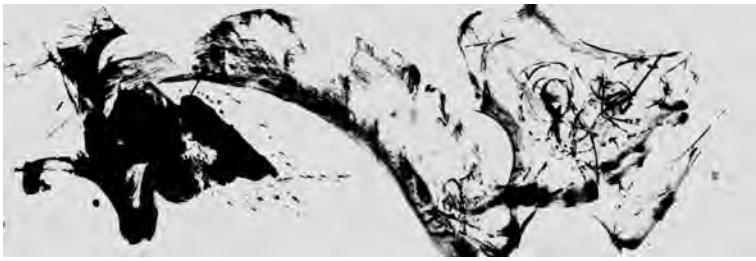
〈三川博の歌〉

市川紫泉　61×182㎝

〈思い出の夏〉

齋賀清翠　55×175㎝

〈燁〉



原島春汀　61×180㎝

古筆鑑賞 ㊷

李嶠雑詠残巻　平安　伝　嵯峨天皇 ②

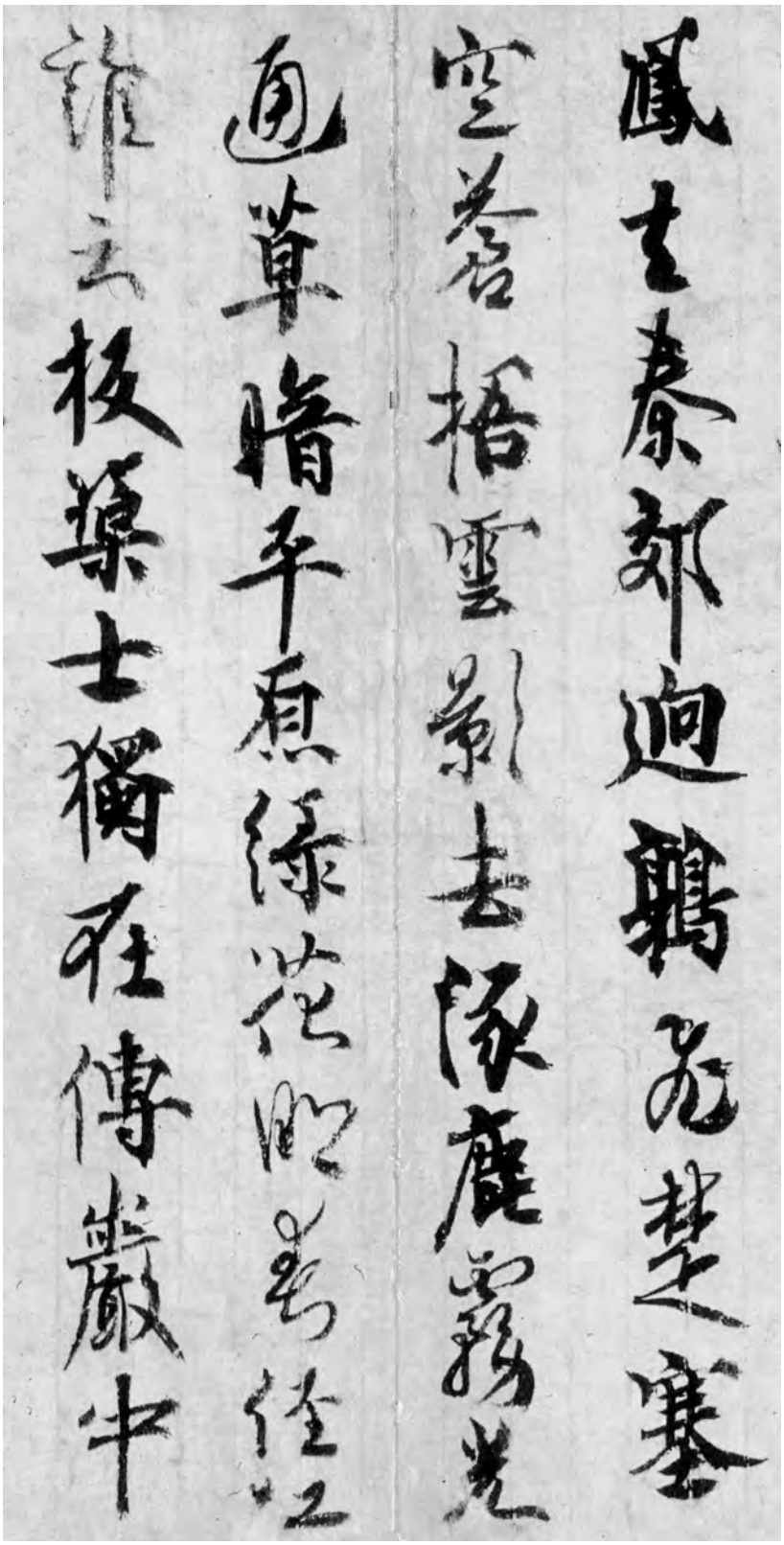
漢字研究部臨書課題 ＝（半紙普通判・縦使用）左記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題 ＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）当該古典の左記掲載部分以外も可。

〈解説〉李嶠雑詠残巻は、嵯峨天皇の宸翰（天皇の真筆）といわれている。しかし、天皇自筆とされる「光定戒牒」とは筆跡が違うことから別の筆者とする説もある。嵯峨天皇宸翰としては他に「般若心経」がある。

淳和天皇の第二皇子の恒貞親王（825～884）の伝記である『恒貞親王伝』に嵯峨天皇の宸翰は「勁筋乏肉」であると書かれている。「勁筋乏肉」とは点画が細くて筆力があることをいう。自在にして緩急抑揚の変化に富み、筆力と筆勢が豊かな運筆はまさに欧陽詢風である。

嵯峨天皇宸翰の「般若心経」は京都北嵯峨の大覚寺（もと嵯峨天皇の離宮）に寺宝として伝わるが、60年に一度戊戌の年に公開される。今年がその年に当たる。（公開期間は10月1日から11月31日まで）（編集部）



（掲載図版90％に縮小）

〈野〉鳳去秦郊迥、鶉飛楚塞空。蒼梧雲影去、涿鹿霧光通。草暗平原緑、花明春径紅。誰云板築士、独在伝巖中。

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

古筆鑑賞 ⑰⑥

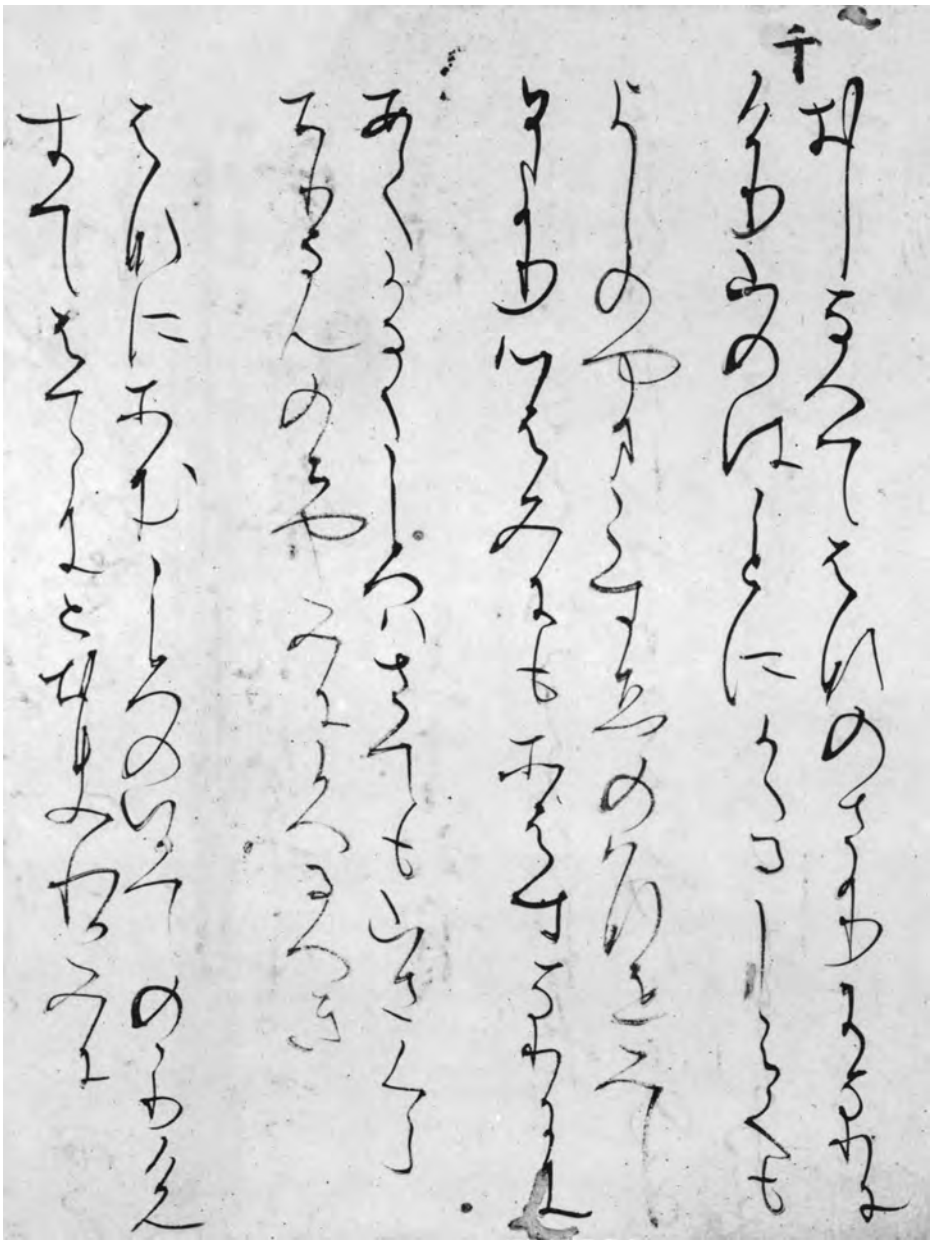
山家心中抄（さんかしんちゅうしょう） 平安 伝 西行筆 ②

かな研究部 臨書課題

（半紙普通判（**料紙可**）・**縦長**に使用）
別紙を裁断して貼付も可。半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。
上記の古筆の掲載部分より**歌一首以上を書く**。（**全臨も可**）

特別研究部 臨書課題

（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）上記の掲載以外も可。



（宮内庁蔵）

書芸文化新社「平安朝かな名蹟選集」

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

〈よみ〉

おしなべてはなのさかりになりに
けり山のはごとにかゝるしらくも
よしのやまこずゑのはなをみし
日より心はみにもそはずなりにき
あくがるゝこゝろはさても山ざくら
ちりなんのちやみにかへるべき
はなにそむこゝろのいかでのこりけむ
すてはてゝきとおもふわがみに

〈解説〉

山家心中抄は、西行の約2,000首の和歌のうち、すぐれた360首を選び書写されている。書式は行書（ぎょうがき）で、大部分歌一首が2行で書かれている。また、勅撰集所蔵の歌には「新」「千」「勅」「続」などと集付けがされている。（新は『新古今集』、千は『千載集』、勅は『新勅撰集』、続は『続後撰集』である。）その書は、外連味（けれんみ）のないシンプルな字形、用筆は直筆が多く使われ、線は細く、きびきびとした直線的である。そのため紙面に明るく澄んだ表情があり、それが特徴となっている。山家心中抄の第一種（写真図版）の書風は、端正で品格が高い「中務集（なかつかさしゅう）」（伝西行筆）に類似しており、現代のかな学習の好手本といわれている。

（編集部）

※掲載図版は原寸大。

※古筆は原寸（以上も可）で臨書しましょう。

漢字規定　初段以上【十二月十日締めきり】　用紙　半紙普通判

辻元大雲選書

月満星初　よみ（月満ち星初む）

書体＝自由

習い方解説（二）

辻元大雲

月満星初
（月満ち星初む）
満月が輝き、星がまたたく。

満月が輝き、星がまたたく情景です。今回も行書表現で、少しスリムな表情を出してみました。筆はやや硬めの中長鋒を使用しています。大小、潤渇の変化で動きある表現を意識しています。

前回様々な表現をしてみようと申し上げましたが、書体、書風の違いによる多様さは字形ばかりでなく、用具、用材の違いによって更に変化します。特に筆の違いは線質の変化に大きく影響します。普段の半紙での練習でも、いつも同じ筆を使って書く方もおられると思いますが、何も高価な上質な筆でなくとも、安くて使いやすい筆を何種類か揃えてみては如何でしょうか。あまり見向きもしなかった筆が、意外に面白い表情を見せてくれる場合もあります。

漢字規定 秀級以下【十二月十日締めきり】用紙 半紙普通判

広瀬舟雲選書

百姓昭明　よみ（百姓昭明）

書体＝楷書

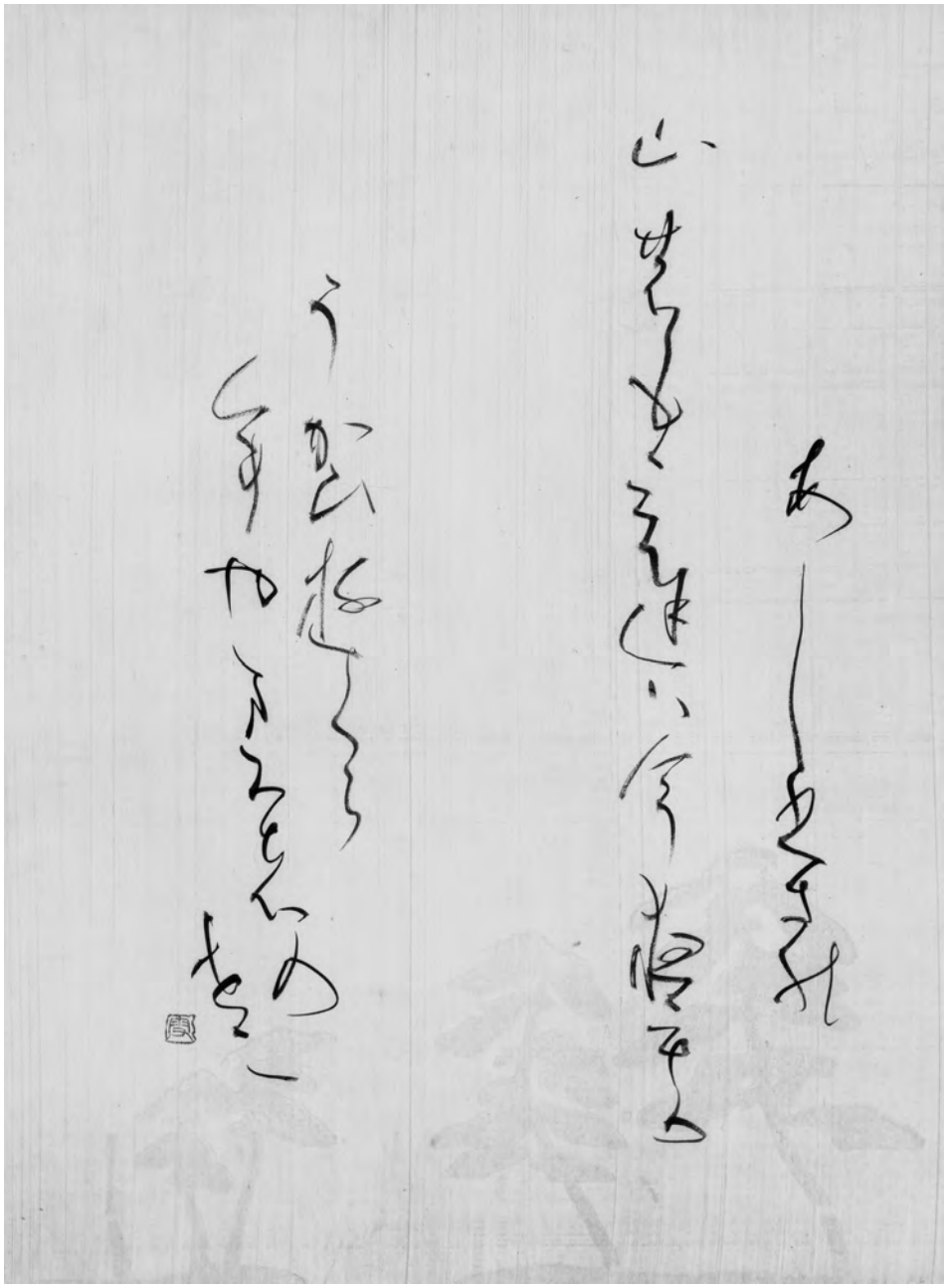
習い方解説（二）

広瀬舟雲

百姓昭明（『書経』堯典）
（百姓昭明）

「昭和」の由来は、四書五経の一つ『書経』の「百姓昭明、協和萬邦」（百姓昭明にして、萬邦を協和す）によります。百姓は「ひゃくせい」とよみ、この書物が著された時代は「一般の人民」という意味でした。昭明は「あきらかなこと」。つまり意訳すると、国民の平和と多くの国々と協力して仲良くするという意味となります。欧陽詢の書を集字して直線的な線の強さを出し倣書してみました。今回、3文字を古典の書作品中によくみられる「異体字」で書いてみました。「姓」の旁「生」の一画目が省略されたもの、「昭」の右上部を「丶とノ」としたもの、「明」のへんを「目へん」にした字形の異体字です。いろいろな字形に挑戦してみてください。

かな規定　初段以上【十二月十日締めきり】用紙　半紙普通判（料紙可）　鈴木せつ子選書



よみ方　あしひ(悲)き(支)の(能)山の(農)黄葉(も三遅八)　今夜も(毛)か(可)
浮(う)かひ行(遊)く(久)らむ(牟)山(や万)川(可者)の瀬(世)に(二)

創作

習い方解説（二）

鈴木せつ子

あしびきの山の黄葉今夜もか
浮かび行くらむ山川の瀬に
（大伴書持・万葉集）

「山のもみじは　今夜もまた
はらはらと散っては流れている
ことであろう　山あいの川の瀬
に」の意

行頭を上げ下げし、行脚をほぼ揃えることにより、雑木林をイメージさせた散らし形式です。

縦に流れるかなを、生き生きとした作品にするには、線の呼応が重要なポイントになります。字形のみにこだわらず、その形と共に線の呼び合う方向を探ることが大切です。線は人の心の動きと深い関係があり、ダラダラとした勢いのない線や、穂先だけで書いた様な抑揚のないものはよくありません。

書持は家持の弟で、宴席で用意された黄葉には関心を示さず、山中の暗闇を流れてゆく黄葉へと思いを馳せ、美しさとは何かを追求した新しい感覚の持ち主の歌人とのこと。

かな規定　秀級以下【十二月十日締めきり】　用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真の和歌を臨書する。または部分（2字以上の連綿）を臨書する。

粘葉本和漢朗詠集
（掲載写真拡大123％）

よみ方　と(東)き(支)はなるま(万)つ(徒)のなだ(多)てに(尓)あやな(那)く(久)
もかか(こ)れるふぢのさ(散)き(支)てちるか(可)な(那)　貫之

習い方解説 (二)

佐藤希雲

世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには
思ふ人こそほだしなりけれ
（物部吉名・古今集）

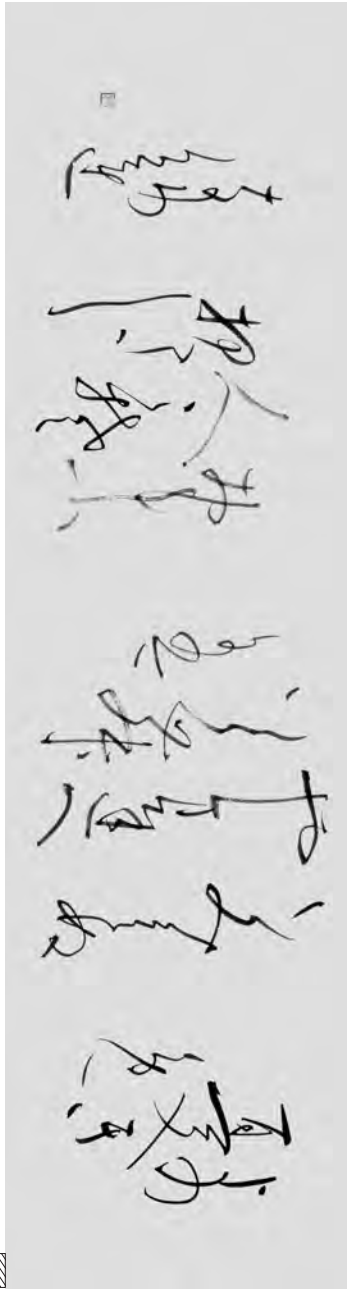
詞書に「同じ文字なき歌」とある古今集の一首です。歌意は、世間の辛さをのがれ出家しようと思うが、愛する人のことを考えると思い切れないことだ、くらいの意。

横形式で四つの集団に分けてみました。墨継ぎは「こそ」です。集団の中の行間の取り方もポイントになります。

※ヨコ形式に限る

かな条幅規定【十二月十日締めきり】　用紙　小画仙紙半切（料紙可）

佐藤希雲選書



よみ方　世(よ)の憂きめ(免)　見(美)えぬ山(や万)路(遅)へ　入(い)らむ(舞)に(尓)は(盤)
思(おも)ふ人こそ(楚)ほ(報)だ(多)しなり(利)け(介)れ(連)

創作

出品券貼付位置

漢字条幅規定　初段以上【十二月十日締めきり】用紙　小画仙紙半切

小林琴水選書

月落烏啼霜滿天　江楓漁火對愁眠
（張繼）
（月落ち烏啼いて霜天に満つ　江楓の漁火愁眠に対す）

書体＝自由

漢字条幅規定　秀級以下【十二月十日締めきり】用紙　小画仙紙半切

千葉蒼玄選書

和顔愛語
（和顔愛語）

書体＝自由

習い方解説 (二)

小林琴水

有名な寒山寺の詩、皆さんよく書く詩です。単体で連綿なしで書いてみました。連綿線はありませんが、ポンポンと筆を踊らせるように、次への字の流れをつけることに注意しながら書きましょう！

リズムにのせて書くことが大切です。

※タテ形式に限る

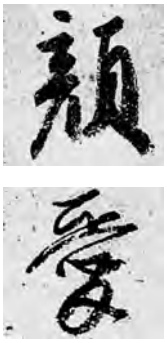
習い方解説 (二)

千葉蒼玄

「なごやかで柔らかい表情、親愛の気持ちのこもった言葉」

和顔愛語のあとに先意承問と続きます。和やかな顔と思いやりの言葉で人に接して、先に相手の気持ちを察して、何ができるか自分に問うということでしょう。

王羲之の風格のある字形とは違い、顔真卿の祭姪稿は良い意味での泥臭いねっとりとした熱気のある線質が特徴です。懐を広くどっしりとした筆致でと心がけました。



ペン字規定【十二月十日締めきり】

見越雪枝選書

月は空と地とを
やはらかに綴てゆく温った言葉
或時霧の中にゆらめいて
精氣を示す不思議な韻律
三木露風「月の韻律（抄）」　雪枝書

用紙＝はがきの大きさ（14.8×10㎝）、白色のもの、**黒インク**使用のこと

書体＝自由

習い方解説 (二)

見越雪枝

今回も詩文です。字配り良く書く要件として、紙面に対する文字の大きさを考慮します。また、漢字と漢字、漢字とかななどの相互の大きさも考えて書きましょう。漢字と漢字が続く場合は、画数の少ない方の文字をやや小さめに書く。漢字とかなの場合は、かなを小さめにするとまとまりよく配置されます。

また、行書形式にしてかなを連綿することにより、雰囲気も固くならず温和な趣になります。連綿する場合、1～2文字程度が良いでしょう。実線でなく意連によって優美な調和が醸し出されます。

※意連…書において形連に対する言葉。点と線、文字と文字との間において目に見えないが気持ちの繋がりが表われている事。

10月号(690)のペン字手本の中で「…美くしさに…」とありますが、これは八木重吉「素朴な琴」の原文に基づいたものです。

※落款（自分の名前）を必ず入れる。

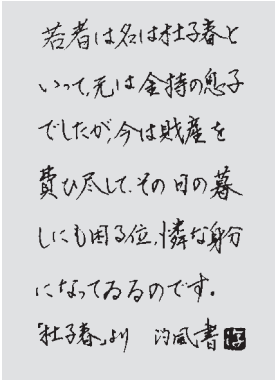
今月のホープ作品各部総評

NO.689

ペン字部　師範　高橋　汐風

重厚な書線の横作品。紙面構成もよく品位のある作品に仕上がっている。

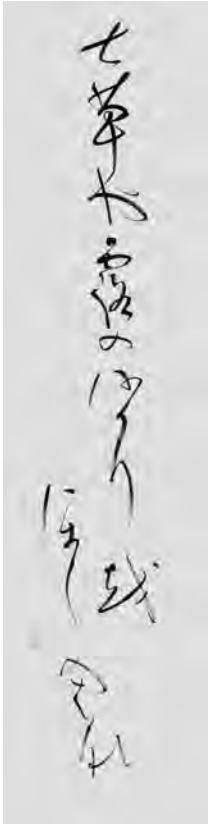
◎ペン字部総評　筆力の充実した明るく丁寧な作品が多く好感がもてる。暮らしの中に根ざした実用書として横書きに挑戦して下さい。（仙草評）



かな条幅部　師範　齋藤　杏邑

句の情感に深く心を寄せながら、流されることなく潔い表現となり見事。捺印の位置よく、相応しい。

◎かな条幅部総評　字数の少なさを字粒大で補うことは余白美を損なうので要注意。漢字の花、変体がな本に誤字散見、確認を。（明子評）



現代詩文書部　特選　市川　紫泉

小文字ながらも悠々とした文字の形が、余白の美しさと融合して叙情的な田園風景を表現出来た。

◎現代詩文書部総評　色々な筆で試し書きをし、構成とマッチするもので書作して欲しい。（梓江評）

前衛書部　特選　井上　恵子

独自の感性と表現力が発揮された作。線のバランス、余白の美など魅力的。

◎前衛書部総評　創造力豊かな作が見られた。半紙作品に見合う印の大きさ一考のこと。（蓮紅評）

漢字条幅部　師範　松田　藍華

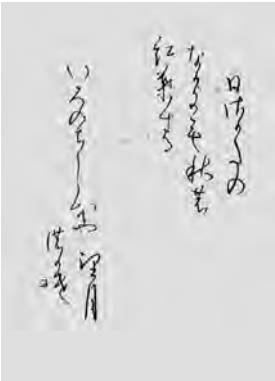
それだけで字形が美しい篆書体を作品にするにはその先がモノを言う。この作品には「その先」がある。

◎漢字条幅部総評　横作品を楽しみながらとり組んでいる姿勢あり。（上級）「酌」などに誤字が見られ残念な落選もあった。（翠風評）

かな部　師範　梅津佳代子

後半が少々小ぶりだが、料紙の図柄が生かされ却って美しく仕上がった。安定した筆致で清々しい。

◎かな部総評　一行目が強すぎたり渇筆が貧弱すぎるなど、全体の調和を欠くものが多かった。可・尓などは小さ目がよい。（洋子評）



漢字部　師範　小山内谷玲

鋭い切れ味と多彩な表情を見せる線質の変化が紙面に動きを与えて妙。リズム感が魅力。

◎漢字部総評　上級5文字表現は参考例の字配りに苦労した感あり。様々な取り組みを期待する。初級楷書も書風の研究を。（大雲評）

今月の

特別研究部優秀作品（特選）

選評　種谷萬城　白石和楓　木村東舟　倉林紅瑤

かな　（宗苑社）　茂木絢水

茂木絢水書　35×135㎝

「古今和歌集　東歌より」

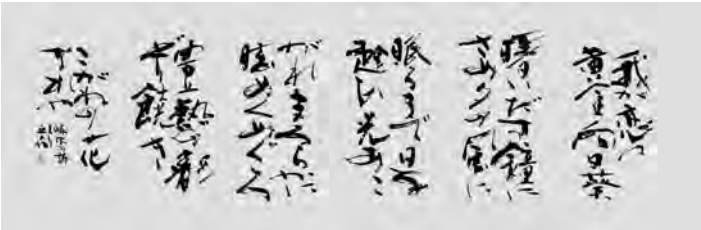
◆技巧的な構成でなく極自然。ゆったりと上品。一葉毎の分割方法は制作上便利なもので多く活用したい。（東舟評）

◆一葉ごとに表現を工夫した大らかで格調高い作品。潤渇、墨継ぎも見事で特に渇筆の呼吸が素晴らしい。（和楓評）

◆暢びやかで、柔らかい線が心地良い。温和で品性高く、散らし方も自然。素直で穏やかな空気が流れる。（萬城評）

◆美しい料紙半紙五葉にそれぞれ散らし方を工夫。穏やかな線条と軽やかなリズムが快い。清らかな響きを奏でている。（紅瑤評）

現代詩文書　（麗澤会）　秋山之扇「黄金向日葵」



秋山之扇書　60×180㎝

◆濃墨で、一字ずつが豊かな2行構成が最後まで通貫した安定感ある作品。最後4行と落款表現が良い。（和楓評）

◆余白が美しく見える構成。漢字とかなの線性が同化し、ゆったりとしたリズムが詩情と調和した。（萬城評）

◆濃墨で書かれた啄木の詩。2行ずつ塊にし書き進む構成が新鮮に映る。ほぼ同粒の文字も又面白い。（東舟評）

◆横作品として、集団の構成も自然で詩情溢れる作。重厚な線質のなかに温かみを感じさせる。余白も美しい。（紅瑤評）

臨書　（紅瑤）　金井みどり

「集王聖教序」

部分拡大

金井みどり臨

180×60㎝

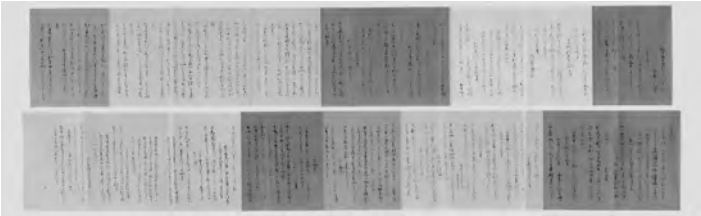
◆丹念で着実な臨書。行間の余白が上下に美しく貫通した。剪装本の影響で字間の詰まった箇所がある。（萬城評）

◆2×6尺に11行の丁寧、慎重な臨書作。原碑の多彩な字形、線質の特徴をよく捉え、最後まで集中した臨書態度見事。（紅瑤評）

◆原帖に対しての観察力がすばらしい。リズムよく一貫していて爽やか。平素の古典への探究心に敬服。（和楓評）

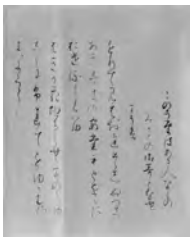
◆2尺6尺に細字で書き詰めた精神力の強さに感動。原本に忠実に取り組み雰囲気を良く表現している。（東舟評）

臨書（AI） 藤村昌子「関戸本古今和歌集」



藤村昌子臨　53×168㎝

部分拡大



◆終始一貫乱れること無く丁寧に仕上げている。やゝ筆圧の欲しい所もあるが、気脈の通った立派な臨。（東舟評）

◆古典を忠実に学書していていつもながら敬服。最後まで一貫したリズム、特に上段前半が素晴らしい。（和楓評）

◆真摯に古典と向き合い、細部の筆法に忠実で綿密な臨書。原本よりやや温和な趣は性格の反映か。（萬城評）

◆古筆の料紙に、上下2段ほぼ原寸で臨書。細部の表情まで的確に捉えた安定作。完成度が高く技術の高さが窺える。（紅瑤評）

前衛書（玄象） 大鹿洋江「無」

大鹿洋江書　120×90㎝

◆重厚な筆致で墨塊鮮やか。スケール大きく気力充実の作。三角法構成から生まれる余白が美しい。（紅瑤評）

◆筆の開閉、ダイナミックではじまり左の中央部から右下の凜とした線が美しく、墨色の妙が魅力的。（和楓評）

◆上部は大胆で大きく筆が動き、下部は一転して凝縮した線で構成し成功。古紙の風味も生きている。（萬城評）

◆大胆に書き下ろした墨の塊を、下方に導く線に魅力を感じる。墨色美しく余白を充分に生かしている。（東舟評）

漢字（もくせい） 西川藤象「擬送別」

西川藤象書　45×174㎝

◆筆先の用法が巧妙で、線が冴え明るい。余白の調和も美しく、横形式で新鮮。爽快感に溢れる作。（萬城評）

◆一字の中にゆとりがあり、筆先が鋭く、明快で横展開が良い。中央4・5行目に盛りあがりがほしい。（和楓評）

◆文字大小を織り交ぜリズミカルに展開する潔い作。線の太細を巧みに駆使し、研ぎ澄まされた感覚。（東舟評）

◆巧みな筆さばき、軽快なリズムが魅力。文字の大小・太細・潤渇の変化に富み、空間構成も美しい。（紅瑤評）

総出品点数 72点

創作の部（42点）
漢字 ― 8点
かな ― 4点
現代 ― 13点
篆刻 ― 0点
前衛 ― 17点
臨書の部（30点）
漢字 ― 28点
かな ― 2点

〈特選候補者〉

（創作の部）

「漢字」
恵雅 板橋 雅邦
八街 熊谷 桃華

「かな」
大雲 神谷 雲卿

「現代詩」
玄穹 千葉 紅雪
陽陽 岩﨑 陽光
大雲 松永 香秋
千葉 渡辺 秋湖

「前衛」
蓮紅 浅野 彩紅
蓮紅 大友 紅蓉
大拙 荒木 孫功
容洲 阿部 邑里
花埜 高橋 清琳

（臨書の部）

「漢字」
蒼原 佐藤 弦佳
英峰 佐藤 桂香
泰涛 山﨑 皐月
澄春 安藤 麗華
大雲 江本 興舟

漢字研究部
（集王聖教序）

選評　前田龍雲

今月のホープ作品

玉渕良章

漢字研究部　特選　玉渕良章

濃墨を巧みに使い、王羲之の書法を彷彿とさせる臨書。決して派手ではないが深遠な力強さを内包し情趣豊かな線質で書かれた。結体も凜とした佇まいがあり温雅でゆとりを感じ、さりげない上品さを醸し出している。

◎漢字研究部総評

この集王聖教序は唐にある弘福寺の僧懐仁が大唐三蔵聖教序・序記・心経を唐王朝所蔵の王羲之の真蹟から集字したものである。王羲之の書は非常に強靭な線質である。「入木」という逸話があるぐらい深く奥行きのある線なのだが、一見、温厚篤実、柔和に見える形ゆえに翻弄されてしまう。よって浅い線の臨書が多々。「書は線である」を念頭に、臨書に、そして書作に励まなければならないと改めて思い知らされた。

麻紫真麗秀岳
衣
子泉理流皐舟

雅陽節一祥
芳子子葉苑

麻霞紅静武洋
矢花霞代美子

敦玲葵有美黄
子子龍美梢扇

かな研究部
（関戸本古今和歌集）

選評　庄司紅邨

今月のホープ作品

浜野永篁

かな研究部　特選　浜野永篁

線の緩急、連綿の運筆もしっかりと理解し、落ち着いた線質で見事に表現。関戸本古今和歌集のリズムを潤渇の妙で美しく書けました。

◎かな研究部総評

関戸本古今和歌集は単調でない筆使いがむずかしい。細部の原帖観察をし、直筆・側筆、順筆・逆筆など、さまざまな場面を読みとることも勉強です。

幹正弘　生子枝

山桜里　房佳美

良甘紅　泉雨霞

佳清春　恵耀華

かな研究部成績表

特選

たかはま　澄春　浜野永篁
大雲　桜玉　鍼鍼　上石　卯月　上泉　耕葉　若葉　こだ　蔦書　颯葵　鍼和　桜松　玉草　大雲　澄春
礒田　苗貞　宇川　野春　日夏　阪華
後岸　石崎　橋本　坂本　吉藤　土野　工井　根高　飯橋　高橋　中口　関尾　松丸　高橋　佳美　幹生　正子　弘枝　山房　桜佳　里美　良雨　甘霞　紅泉　恵慈　清華　愛菫

秀作（60音順）

水華　正く　竜戸　八新　日華　正知　石橋　飯川　石津　飯泉　洋子　子子　海子　琢美　岡部　岡田　今村　市川　石橋　飯川　知津　洋子　子子　藤麻　貴泉　紫泉　嘉泉　津子　子子　琢美
琢千　京葉　千橋　蓮葉　玉松　光彩　竜泉　蔦書　上習　石泉　卯月　上る　耕泉　若雲　こだ　蔦葉　颯書　鍼葵　鍼和　桜松　玉草　大雲　澄春
加納　菊地　吉田　渋谷　本木　青田　櫻木　高田　関橋　中口　松尾　高丸　飯橋　根高　土岸　工井　吉藤　坂本　後藤　石崎　橋本　苗代　礒貝　宇田　浜野　川春　日華　永篁
順子　泰峰　佑子　愛華　美雪　葵郷　龍貞　雅泉　芳枝　恵子　愛石　佳子　幹生　正子　弘枝　山房　桜佳　里美　良雨　甘霞　紅泉　恵慈　清華　愛菫

入選（60音順）

琢琢　琢琢　琢琢　